

6 干からびた胃粘膜の話(胃の陰虚証の症例)



峯 尚志 先生

峯クリニック

1985年 熊本大学医学部 卒業
 1986年 医療法人木津川厚生会加賀屋病院にて三谷和合先生に師事
 1999年 上海中医薬大学に短期留学
 2004年 峯クリニック開設

はじめに

胃の陰虚証とは、暴飲暴食、加齢や膠原病などによって干からびた田んぼのように胃の粘膜が萎縮する病態である。胃が干からびると、お腹がすいて食べてもすぐにお腹が張ったり、げっぷをしたり胃の痛みを覚える。さらに、栄養を吸収できないため、痩せ、便秘、胃の受納機能や降濁機能に障害を起こす。口腔内も舌も乾燥し、舌は紅色を呈し苔は少なくなり、脈は細で数となる(表1)。

このような病態には、干からびた粘膜を潤す治療が必要である。皮膚や粘膜の萎縮や乾燥症状を肺胃の陰虚証と考え、益胃湯や養胃湯(表2)を使用する。

表1 胃陰不足証

- ・胃陰の不足のため、胃の受納機能、降濁機能に障害が生じる。
- ・食少、食欲不振
- ・悪心、胃部不快、胃痛
- ・羸瘦、顔色不華
- ・口乾、大便秘結
- ・舌質紅色、少苔
- ・脈細数

表2 益胃湯と養胃湯

益胃湯 (温病条弁：1798年：呉鞠通)

- ・乾地黄7.5、熟地黄7.5、麦門冬15、沙参9、縮砂3、冰糖3、黄精5
- ・温病で瀉下と汗によって傷津したときに本方を用いるとされるが、滋養肺胃の作用がある。本方は特に胃を滋養する妙薬である。

養胃湯 (臨床指南医案：1764年：葉天士)

- ・沙参15、麦門冬12、甘草1.5、枸杞子12、黄精5、(桑葉4)
- ・肺胃を栄養して潤し、津液を補って乾燥症状を緩和する。
- ・益胃湯に比べて地黄を含まず、気味が軽いため、肺の陰虚証にも用いやすい。

益胃湯は温熱病の経過で起きる脱水症治療のために作られた処方、養胃湯は肺と胃を栄養して潤し、津液を補って乾燥症状を緩和する働きがある。

症 例

症例1：68歳 女性 シェーグレン症候群

主 訴：目と口腔内の乾燥

現 病 歴：2年前より口腔内の乾燥で唾液が十分に出ず、目の乾燥があり角膜炎を起こしている。胃がもたれると訴える。大学病院でシェーグレン症候群と確定診断を受け、1年前より加療中である。

現 症：身長153cm、体重53kg。本症例の漢方医学的所見を図1に示す。

図1 症例1の漢方医学的所見

脈は弦、細。腹力は中等度。
 舌は紅色、乾燥、裂紋、舌苔少ない。



経過：養胃湯投与で、唾液が徐々に出るようになり、目の乾燥感も改善、点眼を忘れるようになった。その後、益胃湯に変方したところ、3ヵ月後にはすべての愁訴が改善した。益胃湯には地黄が配合されているものの、胃のもたれもなく服用可能である。エキス製剤であれば、十全大補湯合麦門冬湯で代用可能である。

症例2：67歳 女性 舌痛、胃痛、食欲不振

主 訴：舌痛、胃痛、食欲不振

現 病 歴：4、5年前から舌の耐えがたい痛みを自覚し、内科、口腔歯科、耳鼻科、神経科などを受診するが、病因不明と言われた。その後、唾液が出なくなり、食事が摂りにくく、不眠が持続した。何を食べても苦く感じる。食欲はあるが食べると食後約2時間後に胃痛が起こるので、少ししか食べられなかった。食べるのが怖く、水分も摂りにくいということで、体重は半年間で12kgも減少した。便秘があり、身体がだるくてたまらないと訴えた。

多くの医療機関を受診するが、治療薬はないと言われ、うつ病と診断された。しかし、抗うつ薬も効果がなく、うつ病治療のために電気ショック療法を受けたが、症状はますます悪化し、当院を受診した。

現 症：初診時の所見および最近の舌所見を図2に示す。抗核抗体は軽度陽性、シェーグレン症候群の関連抗体は陰性であった。舌は当初は萎縮して口

から出せない状態であったので、随分とよくなったが、それでも胖大で萎縮し、亀裂があり、苔が少なく典型的な気陰両虚の所見を呈していた。

経 過：胃痛があるため制酸剤が手放せないと言うが、中止した。初診時には、気味の軽い生薬を選び、沙参、麦門冬、甘草を3日分処方した。本処方が服薬可能であったことから、益胃湯を3日分処方したが、胃がもたれるとの訴えがあり、養胃湯に変方した。その結果、胃痛、舌痛とも次第に改善した。

その後も養胃湯の服用を続けることで食事が摂れるようになったが、脾虚による痰がみられるようになったので二陳湯に当帰、地黄を加えた金水六君煎を処方したところ痰も改善した。エキス製剤であれば、二陳湯合当帰芍薬散あるいは二陳湯合麦門冬湯で、津液を補いながら去痰することで代用可能である。便秘には麻子仁丸を併用し、体重は40kgまで戻った。

さらに季節が秋になると、皮膚や粘膜も乾燥してくるため、再び養胃湯に変方した。すると、肌も潤って艶がよくなり体重は48kgまで増加した。初診以来、数ヵ月はにこりともしなかったが、最近は笑顔で通院するようになった。

図2 症例2の漢方医学的所見

羸瘦し、抑うつ状態。脈は沈、細。舌は極度に萎縮、萎軟、白苔少量。胖大、亀裂。気陰両虚。



COMMENTS

後山：ありがとうございました。大変参考になる症例でした。ところで、胃の陰虚証は日常診療でどのようなことを指標とすればよいのでしょうか。

峯：皮膚や粘膜、とくに肌の状態をよく観察して、肌が乾燥していると陰虚証を疑い、さらに口腔粘膜や舌を観察するとよいと考えています。